

森の紙芝居部門 中学生の部 最優秀賞（林野庁長官賞）

「ゆかのひみつの森」 作：はたやファミリー



「ゆかの秘密の森」  
ランラン、ランラン・・・



ゆかは、毎日森へ行きます。大好きな森は、秋になったのでたくさんの木の  
実がなっています。  
ゆかは、かごを持って出かけました。



「おはよう、鳥さん。」  
「おはよう、リスさん。」  
ピピピピ。チチチチ。  
「おはよう、ゆかちゃん。」  
小鳥達が、答えます。  
「今日は、森の奥に落ち始めた栗を拾いに行くのよ。」  
ゆかは、森の奥へどんどん歩いて行きました。  
「あつた、あつた。たくさんおちているわ。」



拾い始めようとしたとたん、ポツリ、ポツリと雨が降り始めました。  
「どうしよう、困ったわ。」  
ゴロゴロゴロ、ザー。  
雨が勢いよく降り出しました。



ゆかは、怖くなって慌てて木の下へ隠れました。  
そして悲しくなって、泣き出してしまいました。  
「お母さーん。怖いよー。」  
「ゆかちゃん、ゆかちゃん。大丈夫だよ。元気だして。僕がついてるよ。」  
ゆかは、びっくりして辺りを見回しました。  
「だあれ？どこにいるの？」  
「ここだよ、ここ。木の上。」



見ると、木の枝に小さな男の子が座っていました。  
「僕は、森の妖精リーフ。森を守っているんだ。  
森の事なら何でも知ってるよ。君がいつも森に来る事もね。」  
「本当？」 「そうさ、でも僕たちは子供にしか見えないよ。」  
「そうなの？」 「君を僕の仲間の所へ連れて行ってあげようか？」  
「うん。行きたい。」 「じゃあ、僕の手を握って。」  
ゆかが、手をつかむと体が浮きました。



「わぁ、ステキー。私、空を飛んでる。」  
リーフとゆかは、森の中を木の間を飛んで行きました。たくさんの大きな木をよけながら。  
もしかしたら木の方が、よけてくれているようにも見えました。  
森の奥の方に青く光る池が、見えました。  
リーフはそこに下りました。  
池のほとりには、リーフとそっくりの男の子が7、8人楽しそうに歌を歌っていました。



「こんにちは。ゆかちゃん。」  
「あ、こんにちは。私の事を知っているのね。」  
ゆかが言うと、リーフが言いました。  
「僕たちは何でも知ってるって言ったじゃないか。  
さぁ、いっしょに歌おうよ。」



「森においでよ。森はステキさ。  
鳥も魚も木も、生き物みんな仲間だよ……。」  
歌い始めると、あちからこちからたくさんの動物が集まって来ました。  
木の実やぶどうを持ってきてくれたのは、キツネさんやウサギさんです。  
みんなで楽しく歌って踊りました。  
すっかり雨もやんでいました。いつの間にか温かい風に包まれていました。  
どの位、経ったのでしょうか。  
「ゆかー」



遠くの方で声がしました。  
「あ、お母さん。」  
すると、動物達が一斉にどこかへ走って行ってしまいました。



「お母さーん。」  
「ゆか、ここにいたの。心配したのよ。」  
「お母さん、私の事を助けてくれた妖精さん達よ。リーフって言うのよ。」  
と、後ろを指差しました。  
「そう。」  
お母さんは、そう言っただけでした。リーフが言ったように大人には、妖精の姿は見えないのです。  
「さぁ、帰りましょう。」  
お母さんに手を引かれて、ゆかは歩き始めました。そして、もう1度振り返って



大きな声で、言いました。  
「リーフありがとう。森の妖精さん、みんなありがとう。また、  
会いに来るからね。絶対絶対来るからね。忘れないで待っててねー。」  
ゆかは、お母さんと手をつないで帰って行きました。  
リーフは少し寂しそうに手をふりました。  
森の木々たちが、一斉に葉を落とすはじめました。